

## 少年独りぼっちの死

愛知県中学二年生の自殺の遺書は、最も保守的な文部省を動かした。いたいけない命とひきかえに、いじめやたかりへの怒りがようやく全国的に燃え上がっている。

家族の悲痛無念さと共に、愛児に対する親としての呵責かしやくの苦も永劫えいごうであろう。少年は親を責めずひたすら感謝と許しを乞い続けた。それだからこそなおたえられない。遺書は、「忠告どおり死なせてもらいます。でも自分のせいになされて、たたかれたり、けられたり、て、つらいですね。死んでおわびいたします」と。

長い遺書の全面は少年の強い感受性と限りない優しさに満ちている。最高の美德、その優しさが彼に死を選ばさせているから痛ましい。

子供に限らない、大の男でも最後の避難所が与えられねば生きられない。少年にそれがすっかり失われていた。父たちは少年を責めるのみで、わが子の前に身を挺たいし戦うべきたくさんの相手を見失っていた。捨て身の愛を。

私は生々しく思い出す。旧制高校時代、運動部を脱した時全運動部から受けたあの

迫害と屈辱を。全寮制、闇夜熟睡中を集団で襲う。下駄で頭をけり全身を踏んづける。幾晩幾夜の恐怖。舎監しゃかんも学校も見ん振り。孤立無援。死か生か。家から取り寄せた短刀を懐ふところに、切り死にの決意。ピタリと止んだ。剛氣ごうきか臆病か、私は知らん、それしか道はなかつた。

厳しい人生行路、幼い子らはもちろん、老年が生きゆくには、一人でよい、心ある支えが絶対的に必要である。ヘミングウェイ「老人と海」の結びに、私は幾度も泣かされる。

(一九九四年十二月二十日)